

そうだったのか!

学習評価

先生方の疑問に識者が答えます!

今号の
テーマ

評定への総括の 考え方と方法

Q 観点別学習状況の評価（以下、観点別評価）の結果を評定に総括する方法には、どのようなものがあるのでしょうか。

A A、B、Cの組み合わせで総括する方法や、A、B、Cを数値に置き換えて総括する方法などがあります。

評定への総括にあたり、観点別評価に係る記録が観点ごとに複数ある場合は、まずはそれらを総括します。総括のタイミングは、単元末、学期末、学年末などが考えられます。総括の方法には、評価結果のA、B、Cの数を基にする方法や、A、B、Cを数値に置き換える方法などがあります（下図①）。

総括した観点別評価の結果は、A、B、Cの組み合わせによる方法や、A、B、Cを数値に置き換える方法などで評定に総括します（下図②）。学期末ごとに評定に総括をしている場合は、各学期の評定の結果を基に学年末の評定に総括する方法もあります。

① 観点別評価に係る記録が観点ごとに複数ある場合の、その総括の方法例

評価結果のA、B、Cの数を基に総括する方法

例えば、3回評価を行った結果が「A B B」ならば、最も数が多い「B」と総括する。

	知識・技能
単元①	A
単元②	B
単元③	B
1学期末の評価	B

評価結果のA、B、Cを数値に置き換えて総括する方法

A=3、B=2、C=1のように数値化。平均値を出して総括する。

	知識・技能	数値変換
単元①	A	→ 3
単元②	B	→ 2
単元③	B	→ 2
1学期末の評価	B	← 平均値 約 2.3

注)「B」とする範囲を「1.5 ≤ 平均値 < 2.5」とした例。

② 総括した観点別評価の結果を基に評定に総括する方法例

各観点の評価結果をA、B、Cの組み合わせにより総括する方法

例えば、総括した3観点の評価結果が「ABA」ならば、「4」とする。A、B、Cの組み合わせと評定がどう対応するかは、事前に設定しておく。

	観点別評価の結果
知識・技能	A
思考・判断・表現	B
主体的に学習に取り組む態度	A
評定	4

A、B、Cの組み合わせと評定の対応例

3観点の評価	評定
AAA	5
AAB / ABA / BAA など	4
ABB / BAB / BBA / BBB など	3
BCC / CBC / CCB など	2
CCC	1

注) ABCの並び順は、知識・技能 / 思考・判断・表現 / 主体的に学習に取り組む態度。

A、B、Cを数値に置き換えて総括する方法

A=5、B=3、C=1のように数値化。平均値を出して総括する。

	観点別評価の結果	数値変換
知識・技能	A	→ 5
思考・判断・表現	B	→ 3
主体的に学習に取り組む態度	A	→ 5
評定	4	← 平均値 約 4.3

注)「4」とする範囲を「3.5 ≤ 平均値 < 4.5」とした例。

※国立教育政策研究所教育課程研究センター「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料（高等学校編）」と、田村教授への取材を基に編集部で作成。

回答者



國學院大學

人間開発学部初等教育学科 教授

田村 学

たむら・まなぶ 専門は教科教育学、教育方法学、カリキュラム論。文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官、同省同局視学官などを経て、現職。著書に、『学習評価』（東洋館出版社）など多数。



評定に総括する際、評価の重みを3観点で均等にせず、観点によって変えてもよいのでしょうか。



学校教育目標や教科・科目の学習目標などに準拠して、3観点の評価の重みを変えてもよいでしょう。

「目標と指導と評価の一体化」の観点から、授業づくりは、学校教育目標や教科・科目の学習目標を踏まえた単元の指導計画を立てて行われることが求められます。その成果を評価するので、目標に応じて3観点の評価の重みづけをすることは問題ないでしょう（右図）。

学校教育目標に準拠するのであれば、全教科・科目で重みづけを統一することが考えられます。一方で、教科・科目によって重視したい観点が異なるのであれば、各教科・科目に3観点の評価の重みづけは任せてもよいかもしれません。

3観点の評価の重みづけをする、しないにかかわらず、評定への総括の考え方や方法は、生徒や保護者に事前に公表するとよいでしょう。生徒や保護者への説明責任を果たせるとともに、生徒が学習の目標や計画を立てる基準となりますし、評定を自己評価できるといった利点もあります。

● 3観点の評価の重みを変えて評価する方法例

3観点の重みを変えた上で各観点を点数化し、その合計点で評定に総括する。

	A	B	C
知識・技能	25点	20点	10点
思考・判断・表現	50点	40点	20点
主体的に学習に取り組む態度	25点	20点	10点

「思考・判断・表現」と他の2観点が2:1になるように重みづけした配点を設定

評定換算表(例)

合計点	3観点の評価	評定
100	AAA	5
95	AAB / BAA	5
90	ABA / BAB	5
85	AAC / ABB / BBA / CAA	4
80	BAC / BBB / CAB	4
75	ABC / CBA	4
70	ACA / BBC / CAC / CBB	4
65	ACB / BCA	3
60	BCB / CBC	3
55	ACC / CCA	3
50	BCC / CCB	2
40	CCC	1

注) ABCの並び順は、知識・技能 / 思考・判断・表現 / 主体的に学習に取り組む態度。

COLUMN

「CCA」の評価はあり得ないのか？

「CCA」は、「知識・技能」「思考・判断・表現」がともに「C」で、「主体的に学習に取り組む態度」が「A」という結果です。3観点は強く関連しているため、評価結果に大きなばらつきは生じにくいと思われませんが、「『CCA』はあり得ない」とは言い切れず、「『CCA』は起こりにくい」と言うのが正しいと考えます。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価方法が適切であるならば、その生徒が主体的に学習に取り組んでいても知識・技能や思考力などに向上が見られない場合は、その要因を探って支援することが、評価のあり方ではないでしょう。

田村先生の
まずはここから! アドバイス



評価方法は教科・科目ごとに設定するのが一般的ですが、評定への総括の考え方や方法については、学校全体や教科・科目内で話し合い、統一するのがよいでしょう。



評定への総括の方法は、設定した後も、運用しながらその方法が適切かどうかを検証しましょう。